



## 校長室だより

松江東高等学校

第30号

令和6年5月14日



### ○「エンジョイ・ベースボール」

慶應義塾高校野球部が夏の甲子園で107年ぶりに優勝したのが昨年の夏。メンバーの足立内野手の父親が、松江東高校が選抜大会(甲子園)に初出場してベスト16になった時のキャプテンだったことは、新聞でも紹介されました。



慶應野球部が話題になったのは、その快進撃と「エンジョイ・ベースボール」という取り組み姿勢でした。「野球を楽しむ」という意味だけである講演会で知りました。

- ①チームの全員がベストを尽くすこと。
- ②仲間への気遣いを忘れず、周囲には十分配慮し敬意を払うこと。
- ③自ら工夫し、自発的に努力すること。

要約すれば、この3条件を満たし、そのうえで楽しんでプレーしてこそ上達するというものでした。全力で取り組むということは、全力で準備することにもつながっていました。だから、慶應野球部のウォーミングアップはグランド前からすでにはじまっていました。また、仲間への気遣いはチームワークの良さにつながっていました。相手へ敬意を払う姿勢から、相手をやじらず、むしろはげますくらいの勢いだったそうです。ベンチからの声出しも「がんばれ」とか「ふんばれ」、「集中」というような抽象的なことばかりではなく、意味のある具体的な言葉が飛び交っていたそうです。意味のある言葉を出すためには、相手や自分をしっかりとみていないとできません。そういう意味では全員が集中して試合に臨んでいました。自ら工夫する、自律に向けた主体的な姿勢から、一球ごとにベンチを見たり、監督の顔色をうかがったりはしないそうです。また、ポジティブな言葉を発することに心がけ、「疲れた」というような言葉は脳が不活性になるからしないそうです。逆に、片手の指3本を立てるNO.1 ポーズが話題になりましたが、ピンチの場面でも脳から前向きな精神状態を作り出すことができるポーズでもあったそうです。

鳥取の強豪校である鳥取城北高校の野球部は、相手を見過ごさないように、また周囲を感じる力を高めるために、グランドに来た人には全員があいさつをするそうです。

夏の甲子園で沖縄県勢として初めて頂点に立った興南高校野球部の我喜屋優監督は、「嫌なことや辛いことは逃げても追いかけてくる。そんな逆境も向き合えば友達になるし、最後には宝になる」と語っておられます。また、些細なことでも感謝する姿勢、つまり小さなことを感じられる人間は、大きな仕事ができるとも言っておられます。挑戦をあきらめないこと、感性を高めること、そして人としての土台作りは共通しているように思います。